

令和 2 年 6 月 18 日現在

機関番号：32689

研究種目：挑戦的研究(萌芽)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K18493

研究課題名(和文)近世から近代にかけての日本の書簡文の研究

研究課題名(英文)Some studies of Japanese letters from pre-modern to early times of modern

研究代表者

池澤 一郎(ikezawa, ichiro)

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：70257228

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文):本研究では、近世の学者、詩人、政治家などの著名人の肉筆の書簡を集成した東京国立博物館所蔵『尺璧帖』や世田谷区立郷土博物館所蔵の近代漢学者の書簡集『一人一簡』とを中心とする種々の書簡集またはその影印、模刻本を、研究代表者と研究協力者とが主催する研究会で、大学院生、留学生、博物館美術館学芸員、の参加を得て、分担解説した。『尺璧帖』については、三年間に、二度全体を解説し、翻刻資料を作成、また書簡を各人物の全集などに収載されているか否かを確認し、ほとんどが未収載であって、資料的価値が極めて高いことを確認した。また既収載の書簡との対比し、書簡の執筆年次を考証した。他の資料は論文、著書の形で公刊した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果の一部は、鮮明な書簡の写真とともに、その翻刻や注釈、解釈を併載する形で、複数の論文や著書に掲載、公刊している。論文、著書を作成した研究代表者、研究分担者のみならず、その成果をまとめるにあたって定期的に開催した研究会の参加者が、草書とくずし字でしたためられた日本語の手紙を解説する力を飛躍的に向上させた。その書簡や古文書読解力を以て、研究会参加者はそれぞれの専門分野で、論文、学会発表などの業績を積み重ねている。また参加者の中には、研究会開始時には大学院生であったものが、都内の美術館の学芸員となる者が一名、また都内の市民講座で書簡文の解説法を伝える者が一名出て、社会的貢献を果たした。

研究成果の概要(英文): The contents of this study have associations twice a month of the study of old Japanese letters in the time of pre-modern and modern. Main purpose of these associations has intended to understand of many old letters written by famous poets and scholars in the pre-modern and modern Japan, teaching how to grasp of old letters quickly written in Chinese characters to the students containing Chinese and American. The main collection of letters of this study is preserved in the Tokyo National Museum in Ueno. The book of letters is called "The Treasures of Old Letters". The attendants of this study have totally understood of this book from the top to the bottom for twice for recent three years. We have published some books and essays for the result of this study for three years. We made also some notes of the names of the scholars, poets, politicians and teachers appeared in this and other books of old letters.

研究分野: 日本文学

キーワード: 写真と書簡の併載 論文、著書の公刊 くずし字の読解力の向上 漢字の草書の読解力の向上 研究会参加者の実力向上 研究会参加者の就職 研究会参加者が美術館で書簡解説講座担当 研究会参加者が市民講座で書簡解説講座担当

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

1. 研究開始当初の背景

(1)本研究は、研究分担者である跡見女子大学教授岩田秀行氏が、東京国立博物館所蔵『尺璧帖』という近世の著名な文人、学者、政治家、画家などの書簡を、一人一通を原則に集めた資料が、質量ともに文学、歴史、哲学など人文科学研究諸分野にとって極めて価値が高いということを確認され、元白百合女子大学教授田中善信氏と研究代表者である早稲田大学教授池澤一郎とに研究会の組織を要請し、解読、翻刻を進めることで開始された。

研究会には、大学院生、公共の博物館、美術館、図書館の司書学芸員、またはアメリカや中国の留学生にも参加を呼びかけ、研究代表者、分担者、協力者の指導助言の下、研究会を進めた。この研究会の成果を学界、ひいては社会に論文、著書の形で公表する為に、科研費を申請することにした。研究会の成果を公刊する際には、書簡文の重要性を社会に訴え、加えて社会人の中で、くずし字の候文や草書の漢詩文という『尺璧帖』所収の日本語の文体と表記に慣れ親しみ、解読力を備え、かつ向上させていただくべく、書簡本文のくずし字草書を活字に直す翻刻作業とその成果を原物の書簡の写真とともに掲載することを主眼とした。そのため資料の撮影費、許可費などの経費を仰ぐ必要もあったので、科研費を申請するに至った。

(2)上記の資料『尺璧帖』には、近世期のあらゆる分野の文化人の書簡が集成されているが、著名で、すでに全集などが刊行されている人物の書簡が多数を占めるので、全集の書簡篇との照合を行った結果、多くが全集未収録のものであり、資料的価値が極めて高いことが分かった。また書簡はおおむねくずし字の候文や草書の漢詩文で書き綴られているので、専門分野を異にする多くの研究者の参加が必要となった。ちなみに研究代表者池澤は近世日本の漢詩文を専攻し、研究分担者岩田秀行氏は近世近代の戯作文学を専攻し、研究協力者田中善信氏は近世俳文学を専攻する。

(3)候文と漢詩文という日本語の文体は、近代に入っても廃止されることはなく、第二次世界大戦前までは、くずし字の候文と草書の漢詩文とを、自在に読み書きできる学者、文化人、読書人が少なくなかった。『尺璧帖』は現在、所蔵機関で定期的に公開展示されている関係で、研究資料として自由に写真撮影を行い、複製を作りにくい状況にあるので、本研究会を運営して、若手研究者の書簡解読能力を涵養するという目的を達成するためには、『尺璧帖』以外の近世、そして近代のくずし字の候文、草書の漢詩文の書簡を収集し、研究対象とする必要が生じた。また既に公刊されている書籍の中にも書簡資料を原典の写真あるいは影印のみ、あるいは翻刻活字とともに掲載するものが少なくない。これは近世から発して近代に入っても陸続と出版されているので、翻刻のないものはそれを作成し、翻刻のすでにあるものはその再検討なども、研究会の内容の一部とした。これらの既刊の書簡資料集を整理し、目録などを作成して利用者の便宜に供することも意識して本研究は開始された。

2. 研究の目的

(1)本研究は、上記のように、東京国立博物館所蔵の『尺璧帖』という近世の閩人の書簡約300通を集めた冊子を中心とする、日本近世近代の書簡資料を、研究代表者、研究分担者、研究協力者の運営指導の下、大学院生を中心に、博物館美術館学芸員、図書館司書で組織される研究会で輪読することを研究活動の中心に据えた。参加者の中には、中国や欧米からの留学生もいる。

書簡資料はすべて、漢詩文の草書とくずし字の候文とで記されているので、現代の日本では意識的に特殊な機会を設けるのでなくては、なかなか接する機会もない。そのため、書簡文を読み解きうる力は、日本の文学、歴史、哲学を学ぶ人文科学系の研究者の間では、古文書などと古書籍とを解読する力とは直結していて、必須のものであることが、厳然たる事実であるにも関わらず、これを放置して、書簡資料読解能力は日を追って低下の一途を辿っている。

(2)本研究では、まず研究会参加者の間で、従来備えている漢詩文の草書とくずし字の候文の解読力の維持向上を目的とした。また、『尺璧帖』を中心とする近世近代の書簡資料を、鮮明な写真資料とともに、著書論文の形で刊行し、研究会参加者のみならず、一般社会の読書人の間においても、書簡資料の重要性の認識を高め、漢詩文の草書とくずし字の候文という日本語の難解な文献読解能力を涵養してもらうことを目指している。

3. 研究の方法

(1)本研究の方法は、上記のような日本近世、近代の書簡資料を、輪読する研究会が基盤となって進められた。上記『尺璧帖』を研究代表者と研究会参加者との間で分担し、毎月二回ほど研究代表者の所属機関で開催される研究会において、五通から十通ほどの書簡を丁寧に朗読し、書簡や古文書の読み方扱い方を確認しつつ、特に難読の草書、くずし字については、一字一句に拘泥しつつ、厳密な解読を期した。三年間の研究活動期間中に『尺璧帖』の三百通の書簡を二度通読することが出来た。

(2)一度目の通読においては、本文の解読を中心に進めたが、いくつか難読の箇所を確認し、所蔵機関に赴いて、原資料を確認し、撮影、校訂を進めた。二度目の通読においては、『尺璧帖』

所収の書簡を収集、製本した旧所蔵者池田成彬氏が、書簡を添付した台紙の上層部にペンで書き込んだその書簡のすべての書き手の略歴が漢文で記してあるのを、誤字脱字や事実誤認を検討しながら、すべて訓読した。また二回目の輪読においては、書簡本文に登場する人名や書名に関する註を加え、書簡の内容のあらましを記し、書簡の書き手に関する全集などの文献や書簡集に照らして、書簡の執筆年次などが考証できるものはそれを行った。

(3) 研究会で解読したのは、『尺璧帖』だけではなく、書簡本文と同じ草書の漢詩文やくずし字で記された影印資料集や写真付き翻刻書簡集、近代の明治大正期を中心とする文化人の書簡を収集し、それをも解読し、著書論文の形態で出版することとした。『尺璧帖』以外で主に取り組んだのは、世田谷区立郷土資料館に所蔵される『一人一簡』という新潟上越市の教育者にして、書家、漢詩人であった増村朴斎宛の明治大正期の漢学者を中心とする文化人の書簡集をも研究会で輪読した。これについては三年間の活動の中で、一回通読し、二回目に人名、書名に註を施しながら読み進めている。とにかく、精確に読むことが、教育的効果においても、社会的貢献度においても肝要なので、各資料は繰り返し読み直し、一度目の誤読を、二度目三度目で訂正し、ほぼ十全を期して、公刊するように心がけた。

(4) 上に記したように、書簡を解読するときに参考とするために、同じ人物の他の書簡を参照する必要が生じた場合はなるだけ参照した。その過程で、昨今では、データベースの充実で、各図書館に所蔵されている名家の書簡類は検索しやすくなっていることが判明した。

しかし、逆に、江戸時代から明治期にかけて出版された影印翻刻された名家の書簡集類に収められている書簡は、書簡集類の全貌も把握しにくく、検索が難しい状況であるので、それらを検索可能とするため、過去に出版された名家書簡集類をなるだけ列挙し、そこに収められている個々の書簡の索引作成を試みることも、研究分担者が中心となって行うこととした。

4. 研究成果

(1) 本研究の主たる調査対象であった東京国立博物館所蔵『尺璧帖』については、研究会でも最も多く扱い、ためにこの三年間で、二度通読を終えることができた。また旧蔵者にして製本者である池田成彬氏が書簡を貼付した台紙の上層部に漢文を以てペン字で書き込んだ各書簡の書き手についての略歴は、誤字脱字を校訂しながら、すべて訓読を施した。また各書簡について人名書名を中心に簡単な註を付け、各書簡を同じ書き手の他の書簡や全集所収の文献を参照することで、執筆年次の考証などをすることの出来た賀茂真淵、田能村竹田などの書簡も少なくない。

(2) 上記の作業を通じて、『尺璧帖』が、著名な、文化人、政治家の、かつて紹介されたことのない、もちろん未翻刻で、全集未収録の書簡を多く含む極めて資料的価値の高いものであることが判明した。もちろん、由井正雪、松尾芭蕉、宝井其角など明らかな偽簡と思われるも含まれるが、それは瑕瑾という程度に止まる分量である。

(3) 研究会の輪読で精密な読解を施す過程で、部分的には学界でも利用されているこの資料が、その名前が紛らわしいために漢学者の書簡が、浮世絵画家のものとして、旧蔵者が誤認して収録したものを、現在の美術史研究者がそのまま誤りを踏襲して、浮世絵画家の履歴の考証に利用してしまっているなどというケースも浮き彫りになった。このことで、古文書や書簡を精確に読むことがいかに大切であるか、近年一流といわれる専門的研究者の中にも、くずし字や草書で記された日本の文献を正しく扱える者が漸次減少していることを痛感させられた。

(4) 本研究は、研究会参加者の書簡文読解能力の向上を目指して開始され、参加者の中からは都内の美術館の学芸員になって、その公開講座で一般市民に書簡の解読方法を伝授している者が、この三年間で出た。また都内の公共施設の市民講座で書簡文の読み方を講義するようになった大学院生もいる。他にも近代、近世、文学、美術、歴史といった時代や専門分野の領域を越えて、研究会参加者はこの三年間の研究活動を通して、飛躍的に草書の漢詩文やくずし字の候文を読み解く力を向上させたと見られる。

(5) ただ、こうした成果をさらに広い層に普及させるべく、『尺璧帖』を原本の精密な写真とともに翻刻施註して出版するという目的は現在果たせないでいる。それは、二度の通読ではまだ翻刻本文や註の精確度が、公開出版するに値しないということも勿論要因のひとつではある。また所蔵機関である東京国立博物館が、『尺璧帖』を厳重な管理下において、写真撮影の手続きが困難であったことも計画が実現しない一因ではある。撮影許可料については、交渉の結果、大幅に引き下げただき、本科研費の予算内でまかなえる見通しがたったことは、所蔵機関に深謝申し上げる。さらに出版を困難にしているのは、この研究が開始して、全体の三分の一程度について、刊行物に掲載するための写真撮影を終了した直後から、館内の平常展示でこの『尺璧帖』を定期的に公開する方針を取り始めたので、展示の前後に半年近くの時間が生じない限り、撮影をすることができなくなってしまったからである。今後は、展示の前一月くらいまでなら、撮影を許可してもらえよう、粘り強く交渉して行き、なるだけ早く、写真とともに刊行して、一般社会に書簡資料の重要性と書簡解読能力涵養の必要性とを認識してもらえようようにしたい

と願っている。

(6)ただし、『尺璧帖』と同時並行して輪読を進めている『一人一簡』については、所蔵機関である世田谷区立郷土資料館のご厚意もあって、写真撮影はすべて完了しているし、撮影や学術書への写真掲載は無料ということになっている。たいへんありがたいことなので、場合によっては、二度目の輪読に入ったこちらの資料のほうが、翻刻・註・考証・写真を併載する理想的な形で早く公開できるかも知れない。

(7)研究代表者池澤一郎は、この研究活動の中で、近代の漢学者の書簡を収集し、中でも田邊碧堂という漢詩人にして文人画を多く作った人物の書簡を二十通近く集め、すべてを翻刻し、解説を施して、所属機関の紀要に写真とともに掲載した。また池澤は近世から近代にかけて出版された、原物の書簡の本文を模刻し、影印として掲載する書簡資料集をも収集し、江戸時代の文化文政期に刊行された、市河米菴『朶雲帖』、秦星池『和漢対照書札』、同『和漢対照書札 二編』については、全文の翻刻と現代語訳、解説を施して、原本の写真とともに学術雑誌に掲載した。

(8)研究分担者の岩田秀行氏はこの研究期間中に近代の文人画家である『波多野華涯書簡集 門人濱口梧洞との往復書簡』(文学通信、2018年刊)を公刊した。ほぼ完璧に近い書簡本文の翻刻、行き届いた註と解説で、本研究の大きな成果の一つである

(9)研究の目的で記したように、研究分担者岩田秀行氏の調査によって、江戸から明治にかけて出版された影印の書簡集で、参照できた書籍は、約40点、書簡総数は約6,400通ということが判明した。その列举の作業中、森鷗外全集未収録書簡が図版と共に掲載されているのが見付き、森鷗外研究者にそれを報告することができた。その内容は、『鷗外』103号(平成30年7月、森鷗外記念館)に掲載された。この索引データを、点検・充実させて、WEB上で検索可能な状態にして、成果公開したく考えている。上記の書簡資料集の中で、明治の60名の文人の書簡を収めた『現今名家手簡』を図版、解説文、注釈と共に出版することにより、明治期の書簡研究のための資料としたいと考えた。既に解説を終わり、出版社まで決まったが、注釈に手間取り、出版が完了できなかった。しかしながら、できる限り早く、出版にこぎ着け、成果を公開したいと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 12件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 池澤一郎	4. 巻 第64輯
2. 論文標題 書画会の盛況に見る大正期漢詩人の雅交 喜多橘園宛田邊碧堂書簡十八通紹介	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 早稲田大学文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 75-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 池澤一郎	4. 巻 66号
2. 論文標題 早稲田大学図書館所蔵 市嶋春城宛坂口五峰・田辺碧堂書簡紹介	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 早稲田大学図書館紀要	6. 最初と最後の頁 68-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 池澤 一郎	4. 巻 131号
2. 論文標題 木下周南の選んだ大沼枕山の漢詩	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 斯文	6. 最初と最後の頁 1 - 19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 池澤 一郎	4. 巻 4号
2. 論文標題 漢詩を読む楽しみー『枕山詩鈔 七言絶句』に即してー	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本文学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 98-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池澤 一郎	4. 巻 63号
2. 論文標題 漢詩人吉田東伍『國朝詩綜』と『松雲詩草』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 早稲田大学大学院 文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 189 - 206
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池澤 一郎	4. 巻 65号
2. 論文標題 早稲田大学中央図書館蔵『芝蘭堂新元會圖』上層貼紙「磐水府君絶筆」について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 早稲田大学図書館紀要	6. 最初と最後の頁 1 - 33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池澤一郎	4. 巻 第63号
2. 論文標題 日本近世近代の題画文学の魅力 文人画四君子を例に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 和漢比較文学	6. 最初と最後の頁 7-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池澤一郎	4. 巻 第5集
2. 論文標題 柏木如亭詩の魅力	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 太平餘興	6. 最初と最後の頁 5-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池澤一郎	4. 巻 第5集
2. 論文標題 柏木如亭山水図幅紹介	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 太平餘興	6. 最初と最後の頁 1-3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池澤一郎	4. 巻 第97号
2. 論文標題 秦星池著『和漢對照書札』尺牘訓読、俗牘釈文、略解	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 近世文芸 研究と評論	6. 最初と最後の頁 76-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池澤一郎	4. 巻 第65輯
2. 論文標題 日本近世における漢文直読(中国語音読)の挫折	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 早稲田大学大学院文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 145-166
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池澤一郎	4. 巻 第56号
2. 論文標題 日本近代における漢文直読(中国語音読)の挫折	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 早稲田大学比較文学年誌	6. 最初と最後の頁 59-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 池澤一郎
2. 発表標題 近世近代における題画文学の魅力－文人画四君子を例に－
3. 学会等名 和漢比較文学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 池澤一郎
2. 発表標題 近世近代における漢文直読（中国語音読）の挫折
3. 学会等名 和漢比較文学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 岩田秀行・小田切マリ	4. 発行年 2019年
2. 出版社 文学通信	5. 総ページ数 156頁
3. 書名 波多野華涯書簡集 門人濱口梧洞との往復書簡	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	岩田 秀行 (iwata hideyuki) (50146198)	跡見学園女子大学・文学部・兼任講師 (32401)	